



各堂  
末摘花

善堂

卷名を弄して号次源氏為十七卷

の之月より名をきて此の月より

りハヤ見

疵病カサハヤ見

りふし寺

勢馬もやしる

ころの反也

常し世のありやう

まろろろ

まろろろろろろろろろ

むろろろろろろろろろろろ

圓教院惣病癒之時は天台座主宣

僧正養老病無術之由不承再之之後

随君余入奉加持即驗仰云

元  
圓觀院法時良源信正の事あり  
天元四年の秋此事小野家右府記  
見ゆ 良源信正の事大伴  
御事あり延長以後の事あり知ら又  
實録の比ゆ来との事ハ云子細や  
又ゆゑに事との事書よあり  
山の事ととも とも勸ふ此は八部花  
らりともて後よりなりとあり  
寺の事ととも 道すともあり  
の事あり  
事んとの事なりとあり

の事一後世のつゝありとあり  
らりともありて 封なりとあり  
つぎハ云つたりとあり  
とせやあり飲らよとあり  
つらなりとあり日とあり まゝ  
ゆゑにありとあり  
多、此はありの事とあり  
ひてとありとあり  
ありつ小ありとあり  
とありとありとあり  
たりし信都 覚忠信都号北山

信都見栄花物語

いづれにわくハ 信都の音重りくしき

思ひのいづりハ何れハ 栄花よりと

きりし目よりと我而し何人ハ何れと

せゆといふは世もあはんとせよと

りかへし

清きい月しり 繪はく似たりれとあ

はし月とてはてりきり又次をて

繪とていふの事のとたりきり

富士の山りあしの嶽 びりの嶽

也してハ亦とていひく列てハ清

間の嶽とてくまきりや富士清り対

うくういれりりふしとくりうげきり

ゆりうしき

ちりまのめを浦と 是よりハ蔵人さま

良清の物後ハ良清ハ懐摩ちうみりりし

ふりて回の名也とくもまらりさきり

のすいもまらり  
いんちうしき

いさり海とらまはうげきりし けしてう海

やうしはうげきりきり何れとくゆき

ちろよとくゆりり 曲クニ

ゆとひハ 寛 ひとりさうりりし 留て

ふらう一祿人まうり

まんりら 花 市堂園白出家三好して八入道

殿と申れ乞より出家の人と入道と云

申と云うりて多田満仲と云うの親教

と其のハドゆり

家いぬり 常字く事と云うりて云りりし

大長の後とて出立也 後ハ子孫と云

くまり出さるハ出世のりりり

近衛中将と云く 藤原言言朝臣

長徳三年三月十三日辞九中将任陸

奥方即日還昇

おくまりきり 奥方と云り

さうりらり らうと云り

京とてと云えぬやうりら 都ハ人ゆ

あしりてふのはこの人あすらんら

そとと云り

さハとて四のつとて 人まのまつ

まらりらりしと云くし余慶と云

代々の国乃はら 国司ハ一任四十年

とて四司にありて八十年めしるらん

とら申りしハ代々の目と云り

海りりらり 身のつひらうと云り

ゆいん せいせんとうじょう

りよじのめ 一禪はらまゝのうらま

あしやう

蔵人としてあしやうのり

正月は具叙位の六位の蔵人から進  
爵して従五位下の叙となり申す  
ゆりとは爵乃申す

かろりのみは爵と名に五位より爵位  
のわりの日本記より凡そ九一位より初  
位まで合して九の品あり其中に正従上  
下とよハ三十階より五位以上ハ初受と

て若かりきりく位より六位七位ハ奉受  
とて大臣以下おろしめて奉用するよりハ  
位初位ハ判受とて奉用してとて  
大臣わらうより初ら六位は叙すの叙  
爵とも冠給ともさうり物ら三十階  
の若しは是ハ初より四とさうり

いとわらうより 又二人のうらま

母のゆりより 又さうり位は凡

そよ兼め親を此かろしや兼め

是長のゆりより

りよひは人よりゆり 後の四司

の事と云ふ事素寒八子のまよと云く事  
見よと云ふ事石足信用

此この月々の事 波ふて月々の事これ

さういふ海のものこの月の事お栗らるや

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや 幸したるものお栗らる

海氏の事お栗らる

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや 幸したるものお栗らる

お栗らるや

お栗らるや 幸したるものお栗らる



の事とやばう物くのあまなり

りよるぬ侍者のりよ 早下と葉より

侍者らうもさうりしや 源氏の侍者

とかくしはしり込りのそふしより

てせし久氣のやのさうりしや

はりし

あつあつの中しやあつと

うしよのひさふりしはあの中し

とまり名はきんあつあつ

あつあつりのうりしりさ 友佐の法し

あつあつのは 風吹うよし清しけの

双中ね久氣とらきりこせとらり

二年のしむうとつあつあつ

のうし源氏よみさあつ

山屋よ 任信ぬしは源し山屋

あつあつあつあつあつあつ

りよひはあつあつ 双中ねよあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつ

はあつ院よ叶鳥りきりしやあつあつ

しらぬあり　しらぬいふもさうしてつらしま  
ゆしはくりかふらぬあり一説あるや  
りしつらきとぬ

かいはりある　髪くころひ子あか様あり  
んり　うころのうさくしりりり

んり　かきゆか人よ　友誼の事なりり

はまに女侍れぬのいりまはく無はつて

すろく　おのりふらうくあり又かき

ぬ休もあり　坐、字

ゆひさんありもろくぬ　あつた落着

のらうとらんとハ　ゆしおささうりはる

おしきりりき　通照うり限りるまき井

のらうとらんと人まろくとらんとむじやハ

とありはるハ通照隠住一可成おさまよ

可成おさまよハ又けりまらりてさあめ

おそきとら

行しな　や納言あり

まきり　人のしきりてゆきとゆきしゆよ

あり過字なり

ゆしうさうり　行しうさうりてらうりり

まのゆりりり　早下のいりきり

ろくありてさぬ時　お務のゆりりりり

かんくきききあり候と 源氏書のみあり

きの事と又信都の事と候り候り候り候り

いふらとあり候り

浄き水のりり候り 小柴地のみま

見の時信都のりり候り

長きり候り有候り ありあふ事候

見やう候り 佛よありあふ名香といふ

牛頭梅檀すい名を香候り候り

世の事りよ山物候り 世時信都の候り

ふ家のり候り 有候の事候り候り

ちりしの大細言 養老三年始置梅

茶便

物思し病付候と 法師の候り候り

ゆい候り候り 葵とのり候り

まふらり候り候り候り候り候り候り

候り候り 一の事候り候り候り候り

静邊やと候り候り候り候り候り

うらり候り候り候り候り候り候り

のり候り候り

山風ひやふ 言まはら中の候り候り

あふり候り候り 引替のり候り候り候り

すの事候り候り 枕草子云と候り候り

ふのゆりてきりさるるいあくく

おさりゆり人 小納言なり

すうしきにて 出づるゆりり用い

うよよ入てき 後冥入陀冥永不閉仏

名は花 山寺り出づるゆりゆりゆり

ゆりゆり

うりゆりゆりゆりゆり 信都のゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

とゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

神の言は神はよりの

まやうしつてりかむをせむこハ

え ちまはまてハ尾着ハいまハ源氏着り也

對面まはるはか節言して用はれ

くらげのさくらりて 尾着の御方

その對面の事よりよりこけはる

ありせむちまハ聊余り對面Pと

のより又ハ源氏着の御方やま

佛のつし ちしはの御方ハくら

み入てととの御方又ハいよりの

まはらりののさくらりぬりハは

ちんよるせむよとまりやま

くらは尾着の御方

ちんよるせむよとまりやま

源氏の御方

ちんよるせむよとまりやま

くらは尾着の御方

ちんよるせむよとまりやま

は花三味 ちんよるせむよとまりやま

くらげの御方

くらげの御方

くらげの御方

くらげの御方

くまのりよりてうりやそとくひふり

のうりまにけとえとねと 信都の邸へ

くまのりよりてうり

こまん 護身ハからすりすり

いぬすすいぬあるも 歯落のまに教はく

くつま 功の入ちて 印付

音の危よて くらよとてなうり

こまのりのらひゆまハ 信都村まの事

まへよつてまのひ くら出まはまの事

めものやひらき ぬやまのりあはれま

くまのりよりてうり

まのりよまはれまはらえり 云々云々

花ハ三年一現則金輪王出現

時ありて一ふひくとのありまは花の

久遠時一現のくらり

時ありて一ふひくくらハ 前の信都の

まのりよまはれまはらえりて源氏よつて

くまのりよりてうり

せしりて答はる

行く山の木の戸より けのりたるは花

ここにまはれり 聖の何れもく独録

くまのりよりて信都まはれり

車を便せむと思ひしは獨鉦の  
人の常任持おりりもりりすの文のし  
今とてさしおるなり

取徳ちよれらるり 百海回り金剛子

の海より申は元皇寺資財帳よそ

こゝに但聖酒ちよれ教珠のりハワ

申ゆらんさそあめくふりくら申と

ハゆり申しぬりん常事なり

ふじろりのつぐよ 作業ハぬりやいせを

タツリ言ふのしれん ばさまよむよ

とてしんささるり居居の也この乃

そとし方定ハ海氏のまうらふしん

さまうらふしんはなりやあめしと

ささるりささるりしりしりしれん

の文よこしはらうこのつとん

ゆしやあめのみりハ 海氏の海字

とらんしち方れのつよのこあや

作車ハなほ 乗給なり

とて所の寺はぬりや 葛城の寺はま

りやささるりのちれぬりやさのし

うらむしつぐや 催馬手

板葉野ハ名所の野し山さの縁り

齊はうあまなり

例のひらりぬき　　りりき吹せぬこ  
山の鳥とゆりりゆん

執也鼓琴瑟鳥舞而魚躍而遊

矣列子

字のくさぬ　　也くぬこ打引ぬきりて  
ぬくぬ目のりぬ　　濁るる女はきりゆき

みはすりあり

力つゝは引りて　　左方長河の園白あり

ら深氏と貴殿一ぬり車八奥さ

らりり

繪よふたつたぬの　　もし書らぬぬりしぬこ

けいりの帯りり　　是り夢しは深氏のぬ

ぬき神もやゆりぬぬりぬまでは深氏乃

ゆりりや

そとぬハはくさ　　もとぬりしゆりぬ

かきんをてそとぬはつぬぬとらとん

もぬくのぬきぬ　　玉りりふはぬぬ

神とぬりぬぬぬぬ

ととぬきぬきぬ　　夫婦の中し

へよらぬぬぬぬぬ

ゆりりぬり　　後すりぬりぬ



小胸はうれて引くもあつた

命をうけて 命あはれなる世にり

まは行く人ともかくもせん

まはありのてふ 白ひやうねるも

ひらたはるるおとんとり多野端を

白ひやうねる言はゆらぬとまり

元よりまゝいとも みるまは侍見方の

まゝまはゆとも 夜更とハ一服とて

ゆらまゝなり

りてる行はるし 侍文のこゝ柴より

雨氣の身ともなればと 世平は面白

夜乃月此風を 現まはれゆらとる

後かといふ奇のいふなり

もろりといふ月おつた 元 河海よとて文

の事といつたゆらゆら 嫁娶記よるゆら

艶書はゆらゆら 八俣令禁戒知の房は二

重い奇と書ていふとて引括て黒紙

引てるまゝ又いふわう二重まゝと茶を

柳金をいふといつたゆらゆら

とゆらとるまゝといひゆらて現鎮とて

三よ黒いといふゆらゆら

ゆらゆらとるまゝといふゆらゆら

ゆくてもあ事ハ 川に人のいそぎ

羽てハあくのうらみ

あはく くらくありりさくそせぬ

はたしうらみ

風吹くらの揚 ちとゆらや花あめ

いしあまやうしい平をものく

うしあめ

いしあまのうらみ きの文は

いしあま

あまのうらみとあまのうらみ

のうらみとあまのうらみ

ハ源氏乃あの中く

あはれらる 雅は津とつげゆぬ

あはれらるのうらみとあまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみとあまのうらみ

あまのうらみとあまのうらみ

あまのうらみとあまのうらみ

あまのうらみとあまのうらみ

あまのうらみとあまのうらみ

あまのうらみとあまのうらみ

あまのうらみとあまのうらみ

の水とらふとてあり

今もやうのよとてあつたのありはな

くやうは早下しとてあつたのありはな

あつたよとてあつたのありはな

我方の根りて早下り

惟光もあつた 曰るの事なり

京の殿 按察士納言の家なり

あつたのよとてあつた 三條文相あつた

月の事なり

あつたのよとてあつた

是よりよとて源氏もあつた

あつたの事なり

あつたのよとてあつた 源氏の事なり

あつたのよとてあつた

あつたのよとてあつた

あつたのよとてあつた

あつたのよとてあつた

あつたのよとてあつた

あつたのよとてあつた

あつたのよとてあつた

あつたのよとてあつた

あつたのよとてあつた

うぬまやらのぬと音りまぬくぬの  
山崎のいそむのまは後の靴やゆ  
らぬりけらふり留まり

見ても又逢来まはるり  
ふても又逢

来稀ひりたりなりし事と馬方しり

てあるもぬぬるまはまともなを

の回りり逢来稀といふまのま

まはるりいふくまはまのまの中

やうりまはるりまのまらゆとせま

ゆきまのまら

せふりやほごん  
りふにまて

れせふりら名と款あり

りふゆり  
は問ゆりりりてまてい

るもやゆりゆりまあり

又いぬあり  
友重乃ゆりやまらそ

て候氏まいりり次たまらまらハ門

のゆりまらゆりまら

今月より  
友重乃月はゆりまら

ゆりゆりゆりまら  
ゆりまらゆりまら

り冷泉院まら

ゆり乳母の命ぬ  
ゆりぬの命婦

ゆりぬの命ぬ

命婦ハのさあしとせり 王命ぬり

りてしりり馬と見あひて 是ハ源氏忠  
 孝此後よは子世まのひて源位小  
 つとぬりよらとの馬とあをゆるり  
 さてゆはしとひぬりはしり後よらと  
 の馬あり思馬とといふは源の後とて  
 此のゆりりのみゆりり馬とといふは  
 すしをふりしりし事と見らる相後り  
 三馬といふはさきと後りり殿高宗  
 傳説と馬とぬりゆりり朕此の後と  
 此の馬ありしりり馬とありて

圓の松林馬と見り十八年ありて三  
 ろよりりゆゆの弟とてハ文彦  
 日といふはゆりしりゆり

吾中しあひのありて 是ハ源氏のゆり  
 とし人のゆりよらりりりやと  
 ありり河海よらゆりりハいり  
 えゆりたはハ勝月承り事しゆり友  
 臺此ゆ事ハありりゆりゆり  
 是はゆりゆりゆりゆりゆり  
 ゆりゆりゆりゆりゆり  
 ゆりゆりゆりゆりゆり

世もむらしきくはらむらむら

はらの主人は 世の上のうらむらむら

てふ糸をたねの星り出さむらむら

ゆらゆらむらむら 娘あの子りむらむら

むらむら

あゝあゝむらむらむらむら 友達のむらむら

月乃ゆらゆらむらむらむら むらむら

まゝまゝむらむらむらむら ありむらむら

しは息むらむらむらむら

むらむらむらむら むらむら らむらむらむらむら

書くと又くりむらむらむらむら むらむらむら

むらむらむら 石意むらむらむらむら

むらむらむらむら

物原むらむらむらむら 奥むらむらむら

ゆらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむら

何のむらむらむらむら 是ハむらむらむら

申とむらむらむらむら 源氏のむらむら

むらむらむらむら

いむらむらむらむら ひとりむらむら

むらむらむらむらむらむらむら

きりぬはらりぬりり

わろく人々 坂のくまきりり舟

漕のりぬりり人々やまきりりり

秋の夕まきりり 坂つきのゆりゆり

きえんをりりりり 尾島の寺れ事り

あしつてりりしもん ありつてり

あゆりりりりりりりりりりりりり

そりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

のりりりりりりりりりりりりり

十月朱花院表新章をり

<sup>元</sup>朱花院の後院より子院履の後れ街

とりりりりりりりりりりりりりり

延長れ街りりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

家乃こ ありりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりりりり

のりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

片息あり ありりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

懐胞ありりりりりりりりりりりり

而も号十がたて思くきり也何一様ハ  
うまうしりてふまのたうし

らこりぬ らこハじけしやふりぬと云ん  
あまゆゆゆりり中の 元きつるまのたひ

との少方の股よか二人冷る院のたひ  
まり又二人いけららのちねのたまり其  
外ハ不教糸端

の口の浦よかたのめハ 菖の葉たけ  
きしとせとくあま海とありえらう  
とらつるや安しはあま若しはらして  
とり對西うくともうしてあしと有

よのうらなひ

は菖の葉たけうらなひよか白波のまじま  
あまあまゆりよとハ

あままうかんとのおハ 元人つてきして  
えおまのハ面白く有あかんのたまり  
よか波のたまりとて 元た細言の乳母のた  
かりりぬとハ海やとてりりひよた  
もんハうらなひらうすりともり

すうしつゆりよとた 元あまのたまり  
引ぬハつとれとた細言のたまり  
れつとゆりよのたまりとて



りせうこゝろを 人なれど力ハしそひと  
を年とてやと感ふるよお坂の岡修治  
尺よはすし高ゆんとき 奥入よハ越え  
まゝあり程に我々のあゝとあゝとあり  
中身とらひく新つらやとさ  
ゆめをひこよ とうとらあり  
もはり今 ともれのとらよとら入  
四十九日 土月上旬お葉かえり後  
ひらし  
ゆめとらまろとらえはるあ まく  
まひ新ハ地人といひかゝんこ又

も母乃事とりらこらありや  
ゆめのけさるも 美のらあり有人と  
うとこ一ふゆかありとあり  
別げけ務といえ乃 暮あゝり新  
つあつひらとまのぬせやうんあま

せん

こころハり 昔ハやのうとらあり  
りん世人とまもしりゆとらあり  
ゆめのうとらありとらありゆめ  
おやとらあり人のいりありゆめ  
念はせハひらきとら又面白あり

まろり霧れ難の 流りりのありぬ

とこひり

人もつとめりしふ 人は音節那々の

とろふ方仕事り

かられゆいおしを ち納ち乳母れ何り

そそあし列ねてしくりしをりふん

ゆきかひとハリあり

ゆふたふ流うらり直と 紫あしのねが

煙のゆととろくし

おのろのしい仕事し 卒余り仕事と

まをりくのねんといふあり

のりもばすくきて え 和琴今の菅撥片

撥とて神果催言果よ用りあり又物子

お八すくきと度物子けくくくといり

又筆いも毎糸曲終よくと菅撥と云ふ

但一線法備尺の寸八未をぬのうのぬい

きとちちれ可ぬ

いさらは田とく物と いちりて八甲う

つとれと子とくし物と越あつさま

せれ 風俗常 陸弁 いちとくこのねんうら

いしひりりり

車乃とくおくさぬく 其まくとせしわ

さしてはひりしん ちりしりしりしり  
は別書とてしハ ちりしりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり  
ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり  
ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり  
ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしりしり

ちりしりしりしり ちりしりしりしり

ちりしりしりしり

ちりしりしりしり

ゆふてんねいなりきひあハ外能母  
の服もこの月の中はまはあひあ  
のさいたときおひりきり又火あ  
服者のひりりもま例りてあま  
まもこの句ハあひあまらありあて  
あまらあり  
位五位うませし 紅雲衣と  
あまらあり

じりし照しりて ちりねも武苑野  
ここのかうしあぬうやまうハあまの  
ゆ 友しこのものしりてあまハ

あまいなりとゆりあま書おりて  
ねんねいあまらあり ちりねあ  
あまらあり 葉平あまらあり  
けしあまらありあまらあり

あまねいあまらあり いちあま  
の性体とてあまらあり

あまらありあまらありあまらあり  
あまらありあまらありあまらあり  
あまらありあまらありあまらあり

あまらありあまらありあまらあり  
あまらありあまらありあまらあり

小形一好あり

主梅くわー 放逐くわ

りり方いりうーを 例りぬひてれ

ーさむらあり

さう一好いぬひふまー 源氏看

の流えあり

未摘花 並

春名ハ云々何と流りて是と世を

ハ云々此横ゆ三並へ源氏看十七葉此

二月より次年の春迄の事ありまはる

春ハ三月よりうく同年此各由の事と

ゆし子程あつりし夕顔の

夕顔の事よほけけて教習此初と

けりまはるよりいまハささの事と

いり方なり夕顔あつてつけてけり

此初心深くやうけりうくく思は

まはるよくありりさく中よくはるなり

未摘のりやうし年そめおきくク脱し  
てさやうらり人ともみかとのゆきり

なまもくうとらとけぬ 夢とと糸の

息あきとの申りくし

あしとまきさ 元 目子桐みび今夕法りて

早交君と桃とりり桃ハ女の真交と

えくらりくしうのりしきまきさハらとつがハ

まふからくやのゆり戦とつじ

あしとまきさ

りしとらけきん人の ぬきのゆきと

あしとまきさ

あしとまきさからうらり ちりま

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり

あしとまきさからうらり 萩のり

へてそり 灯の影に見ゆのしづなり

らんそりのきき物 和らんそらん

らん人のききまよひらんそりなり

故常陸のゆき 元光孝天皇任常陸守

その後貞純親王代明親王御代なり

あつた方へなりゆき みらんそり

方へらんそりなりゆき みらんそり

ゆきひらんそり むらんそり むらんそり

一程りらんそりゆき みらんそり

ゆきらんそり みらんそり

らんそりゆき みらんそり

まらんこのゆき みらんそり

その後まらんそり みらんそり

つらんそりのゆき みらんそり

らんそり みらんそり

ゆきらんそり みらんそり

らんそり みらんそり

らんそり みらんそり

らんそり

らんそり みらんそり

鐘子期知者 みらんそり

らんそりのゆき みらんそり

らうーとくもさういよ

お人々のあはれいふれはよしとてその

命婦君のまへにうりやういのあはれ

物の善う きんはらうまへるさうり

昔お徳とて 仲志と将  
叔母 ういふのういひつ女

事なりは女十女のういふとぬ女一人

おてのまへに音とけうらなれてとて寝

敷うりあり軽うく野の移しうりて

時乃ち改ち居居れもて かなたよまう

ておては家の前くもぬよよまを

おくるはらに君よりいふまかりて行

お本からのういふ見ぬはははのうら

とていふはらういふいふいふいふ

のういふいふいふいふいふいふ

ま井とていふいふいふいふいふ

おまきとていふいふいふいふいふ

おいふいふいふいふいふいふ

のういふいふいふいふいふいふ

のういふいふいふいふいふいふ

のういふいふいふいふいふいふ

のういふいふいふいふいふいふ

のういふいふいふいふいふいふ



時とまぬ抱く<sup>つ</sup>まら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>者ハ<sup>さ</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>  
く<sup>く</sup>中<sup>中</sup>乃<sup>乃</sup>多<sup>多</sup>乱<sup>乱</sup>て<sup>て</sup>流<sup>流</sup>れ<sup>れ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>け<sup>け</sup>月<sup>月</sup>新<sup>新</sup>ハ<sup>ハ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>  
り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>藤<sup>藤</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>流<sup>流</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
り<sup>り</sup>光<sup>光</sup>く<sup>く</sup>音<sup>音</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ん  
い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>人<sup>人</sup>回<sup>回</sup>局<sup>局</sup>ま<sup>ま</sup>て  
ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>流<sup>流</sup>芽<sup>芽</sup>が<sup>が</sup>し<sup>し</sup>て  
ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>ん<sup>ん</sup>人<sup>人</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>

又<sup>又</sup>ち<sup>ち</sup>方<sup>方</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>や  
孫<sup>孫</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>孫<sup>孫</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>此<sup>此</sup>物<sup>物</sup>と<sup>と</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>  
ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>き<sup>き</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>ハ<sup>ハ</sup>源<sup>源</sup>氏<sup>氏</sup>の<sup>の</sup>流<sup>流</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>  
下<sup>下</sup>ハ<sup>ハ</sup>源<sup>源</sup>氏<sup>氏</sup>の<sup>の</sup>流<sup>流</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>

いて<sup>いて</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>流<sup>流</sup>り<sup>り</sup>有<sup>有</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>て  
ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>  
ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>

命<sup>命</sup>婦<sup>婦</sup>ハ<sup>ハ</sup>流<sup>流</sup>乳<sup>乳</sup>母<sup>母</sup>子<sup>子</sup>  
り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>

あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>  
う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>  
思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>  
り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>  
物<sup>物</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ハ<sup>ハ</sup>布<sup>布</sup>衣<sup>衣</sup>と<sup>と</sup>着<sup>着</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>例<sup>例</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>

さすうしつうしきよ 新あるくろのりふ

夏よるのりつハらんふとらんり

らんふふねうらんハ 元 帝まふ富信

云ハ字多院山陵在太内山仁和寺と

案大内山仁和寺の名前記はた夏よハ

内裏のくし用より日中記より内裏と書

て大うらとあり源頼政備寺護の武士

母と三位御り

多し太内山の山よりりりりあり

このりりりハ二月十六日リリリ

りりりねれとも見直と 里ワぬ月の

光とハこれともぬぬの入りりりりり

めらんせりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

随成りりりり 力よらんぬりりりりり

りりりりりりり 暮のうらりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり

あまりりりりりりりりりりりりりり

ますりりりりりりりりりりりりり

ワシのひもろい 批把八引人りれとせし

ワシのひもろい とうらや

人よよまひつとやあていし縁あり

中將のつより源氏のつよりんとも思ひ縁

つこの新とよや也事とよおてせりけ

てらおとらえてこそ一人よりけつと

おとくそおつと

つこの事とやのひもろいたらん 源氏乃

やいせつとせとてあつハ中將つより

たうて源氏のつよりとハつとてあつとんえ

人のちかみりやあつとつとつとてやと

もれまろのつとらん 元 女乃ちかみおれし

つとて男乃のやまらつとら事の有

とまりそハちか方のつとつとのおつと

やい此方のつとさ着りハハ 催馬具のい

ちかみの奇のつと集まりハとらら

いさつとよおりてあぬとまり

らつとつとあつとつとらハはつとあり

つとあつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつと

つとつとつと 元 巻末春のつと

くろくぬゆむやい 友をよかん法事なり  
ふとせりむねまぬ 又のぬるひれすん  
くわーきとせ せうらふりなり  
思ひつひまりぬんともゆひふそんそん  
とぶくつふしふ 思ひつひまりとハ事摘  
のむのうひぬる事とのぬるなりとことら  
それくつふしふハ法仗の法力のと  
くのぬまきまり  
りあやふとふひけるすらうとて  
何やふハハりあふふと何なりせつぬぬ  
ゆとハぬりぬとふらうなり

ちり白ひらふ法 どのりぬとも法を  
いの有とふらり遠茅あり人色法ぬ  
てとらふぬぬまり  
あたま 年きなり女運と法可致す  
ふつふとくひて 命婦の存なり  
ささくひらる ちとけりふらうなり  
えひのく 香字抄云採梅檀樹葉は  
春節為香故曰葉披一云薰衣香一石  
也一云総薰く名也  
つくそひるうらまん 花 香部初後一を言  
とゆきんと御末して言言くそりまごよ



めいけいしき中くわさうりつにれ

めいけいしき中くわさうりつにれ

めいけいしき中くわさうりつにれ

いふぬきりあたまらふと　くは下初水の

ついでにいとてあたまらふと　くは下初水の

ふじの世間乃裡とのあたまらふと　くは下初水の

ありよとてあたまらふと　くは下初水の

ろくろひぬ人のあたまらふと　くは下初水の

の人乃裡はやくとあたまらふと　くは下初水の

ハタタとてあたまらふと　くは下初水の

朱雀院の行幸　あたまらふと　くは下初水の

あたまらふと　くは下初水の

やくとてあたまらふと　くは下初水の

くは下初水の

あたまらふと　くは下初水の

あたまらふと　くは下初水の

秋の事とてあたまらふと　くは下初水の

あたまらふと　くは下初水の

あたまらふと　くは下初水の

あたまらふと　くは下初水の

あたまらふと　くは下初水の

あたまらふと　くは下初水の

いふはらま 書くあはれぬなり

とくしきしき なるいふとぞうんま

とて母のたぐはうと書つなり

中らぬのすらしき 中らぬ中比のまじ

あり上下のいふはらう書しとあり

いふはらんと 源氏の法にま摘の物と

ゆふんとゆふととてとあり

まそとゆふのまじりて ま摘の立人のま

とてとゆふのいふれてせぬなりし

例の法ありいふなり 書つともうなり

八葉のまよふれなりし

ゆふのらゆふとやくらゆふのたぐ 一様とのせ

ゆふのゆふとたたりる者いふて尺

八と一尺八寸は竹とゆふおびりあり

系書し用なり

大敷とさへ 大敷はるるは書下ゆふ打

りありは書しととくありとあり又ま

と力つて大敷と打あり申てありとま

は色ありとあり

ゆふとまされけり たゆふゆふとまてしゆふ

いふはら(初)なり

ゆふらゆふとゆふとゆふと 今ぬ

かみくはらさしひあてとんせり  
と見ありしあひあはれしとんせり  
こねほのけりし

わらまの人はあはれしとんせり

ふりくかきあはれしとんせり

かきあはれしとんせり

雲のゆりあはれしとんせり

二階院へあはれしとんせり

てし霜月の事なり

とんせりしとんせり

かきあはれしとんせり

歩むいひそく <sup>元</sup> 秘父ハ青茶院の教と云へ

かきあはれしとんせり

くきあはれしとんせり 陰膳の如層ハ掃と云

事奉依り是を毎りちのくき

とんせり内教院内約西の人ハと云

掃と云すところのやと云ハと云

の内はと云 <sup>元</sup> 女乃乘りしと云

この井と云しと云のけりし

命りりられハ 莊子曰壽則多辱

と云と云と云 世中と云と云と云



ふもそのひ之の好の鳥ののねははら  
百葉の貪窮問答は長年其女あり  
むせ有れ ヤオキキハツ  
カキキナリ

此やういひて ちりくひありはる名

まじりふりる 器破し書 羽衣

ろく不指しる吹ぬありと云れぬ命

赤院よ 帳とせりし夢をよ赤院よ

ほつり前の赤院リリ

あらくしてあげぬ 赤のさきぬが

ひーひのまひ

まわしてせぬ 老人よの記や

赤院の赤とく云休とあり

さとし ぬばよりぬまりのちりい地ハ

まぐ見ゆり

むぬいつさうしつれとあり 晴かり

ゆり父のとりあうと云いぬ

紅雲ハ深よ父と様父と名付候

ゆり父と云割禁し不及と云と著

用す方れり常一人のゆりハ様父

かくもやとく着れぬゆり

しら野るれは深と魁と云院あり

ゆりありゆり女のうと云いぬ

ハ知の父よと申されしものなり

しらべ一ま 花 褂小大あり小褂ハま一の

人或ありしものまゝなりとぬのりす

衣着しらし小らしよと申す法ハ

方よりしきるとハ申すことなりと

しらきしハ世の父れと云ふこと

ものきのことぬ 銀袋 銀 和名てんこ

西家記曰臨時糸舞人時法着黒銀袋

は夜し又拾遺云中宮 安子 ちののりぬ

ぬと高光ヤお入道横川は位ゆかりつ

しげ

元

白次才云昔蕃客入時重明親王乗

鴨毛車着黒銀袋八重見物ハ同蕃

客籠以件袋一領将来為重物見ハ

大懸毛巾織り衣次昔と着す

車ハ掃けりものと見る

けりてしやと申すなり と申すなり

まーれ言 改 改まると言ふこと

朝日さぬ水のきりぬ とけりてむ

とわたりとらふとや人のさり又つら

のらむとばやあらし

ねの雪のさめつげし ねの雪ハらぬ

あつとくじつつらねりしはあつとくじつな  
あつとくじつな

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

老若躰五温 文集

あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな  
あつとくじつなあつとくじつな

よおのり人くりて吟詠まゝ何

花のぬよせて ちかきくこのまゝなり

世の常なる鏡の 廿二辰のよはは性は結ぶ

まひしむつらき 初夕のまらもむらよ

まひてやまけれと して一編りや

えんまりとせくえは ありてはまらり

えら乃四史 ね 檀紙とら むいあり

いしから書ゆゆとせり 書えふかこ女

又くまのこまらふ書ふはまらとせり

唐衣巻つこの た 袂はくろまらつこの

こ有ハ列し衣のまら用しとまははは氏

のくはゆはしめりあまのこくつこ

入らよぬとせりせきり

はくま衣と の 畏 後 衣 若 時 鑑

衣とけりまらり

袖まらいせき 漢書ハらふまらり

の袖まらふまら人もあつこ

侍候くまらりけはまらあまのね

らハリはまらよと又もえらとせり

まらり

いしから書ゆはまらとせり

いしから書ゆはまらとせり 鑑の事

のさかき

いづれおのゝおのゝおのゝ

おのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

おのゝおのゝおのゝおのゝ

まうしとめがきり

ぬいさん町 女房のさやひきり

くもや えさあとしておけせめり

ふらふらとくさぬ、ふつふつとひのこころこ

く梅花のふせしとさ山のし女とて

政事要略衛門府風俗奇云多と良

女乃如加以称利好午夜滅苦色

好午夜

くらのめれむはく梅花とらうしと

書あやまらるりし

又云くらのめの花とてよとく梅む

とてのねりくひぬりくハ女知り

見ふくの山し女とてすくくくく書陸

のまの中あといらんくめり書摘ハ常

陸のま乃非着られり先之望の山と

は事ハりあこのありらるり木子の

高ハ社とてまよけ書取の後とて

事あり書日とてハ三差の山のし女こと

うあうよよりくく望心の中めとて

後てひらのめれし女といまぬき書

ありのとてと相合ぬりてハいんま

うよと書日の時林ハ常陸より出ぬり

沛沛有り之皇ニと展修と也有り沛沛  
之社り且六共と有り有り有り有り  
然乞ハい物使の法は一向月と事  
師説の家傳有り

のどとじと種あさよい有りこのむむの  
父あひや月と月んあはあきとを  
とゆめく有り有り有り有り有り  
事とも有り有り有り有り有り  
有り人の鼻有り有り有り有り有り  
ふ有りハ種練あ面有り有り有り  
中重有り足ああ有り有り有り

とく有り是ハ源氏の末子と風俗  
あともえ分て有り有り有り有り  
て有り有り有り

沛沛有り奇 実より有り有り  
あ有り有り有り 有り有り有り有り  
ふ有り有り有り 鼻有り有り有り  
き物法有り有り

且近命物後家や 三人鼻赤有り  
有り有り有り有り有り有り  
ありありありありありあり  
有り有り有り有り有り有り

及侍衣とて 未摘りの衣とて有りぬ

うしなは源氏侍とありまの海八等と

あつこの有りり おとこ 命ぬまなり

うは命婦とれ合てとらふなり

あつうひとて ち方うとてとあり

よの字と 見難書

ついでらの能うして 源氏十八歳は月と

一日のりてとハ上句のハりり

中しこころ 男海哥聖武天皇天平元

年正月十四日始有男海哥女海哥天平

十年正月十六日天皇御女殿言安祥

長酒酌奏五節の兼又令十年童女

海哥是盃觴也 初言おとこも月と

節會とて禾よ入て 白鳥と此ハ初お

こりとれちりや

沛殿の前 入りつ下なり

のさめく 入りたりとありあつてと

けいせとせとせとらひけてぬんを

きの ちあつとくハとせとらまてなり

ちけてとハ八世のさひの事なり

几帳ハあひかりとてハららひけて

ちんらとてはくろひとありか



いぢけとてしほりしうらむ心ほりし  
し又いかにしほりしうらむ心ほりし  
やまにこころもほりしきさるるうら

りししとの世にハ常におもひしことり

あけのこころ 権賢の具  
さるる 権賢の具

あけの物ハ あけの年之ころ初よりま

あけの心ハ常乃故 故遠

とける春ハ りの鳥とくはるまを

お毎よあゝあまれもほりし方りし

あけのころハ びらりりはりしこと

てハあけしほりしうらむ心ほりし

あけの心ハ常乃故 故遠

あけのころハ びらりりはりしこと

てハあけしほりしうらむ心ほりし

あけの心ハ常乃故 故遠

あけのころハ びらりりはりしこと

てハあけしほりしうらむ心ほりし

あけの心ハ常乃故 故遠

あけのころハ びらりりはりしこと

てハあけしほりしうらむ心ほりし

あけの心ハ常乃故 故遠

あけのころハ びらりりはりしこと

まことゆを辨してなりきりまゆ其を  
さやうしなはらるるのれ後下ゆは其の  
昔のまゆよりなり

かくくおきまおきも月して野あて

ふりういれ物かとりふりいりいり

ゆいしとま

あつた ふいしむり

まていふふふ 双紙の詞り

乃おんんとまらん のおんらんまらん

平仲もやうしあうりういれな

平仲ハ平貞文ウ字ニ儒者ヨリハ

あさ名とて名は付申るる氏の片字

よりて付のりまて平仲と云貞文を女

小逢てあらのほふうとて水とれ

ておほむせしひ女指量うくすとい

ふていふてあしめし女のあり

あしとつてさあふ見られし人よ

はらへくおのちきよ

河内守ぢよは祝水しあひひりてい

あり平仲もやうしと有して開きたる

うりうりし平仲らりある

あつかんハあひりん ありんハさてあ

りんどうのうらみあり

ききとほろもほろも 花 けしき

の笑梅のやうくのひはらと

オクセウ 素笑梅と杜子養と作る

うらうら 南階の間よねと二まうら

とよむせはひりうらと云鳳輦と東

じまうらよすして凡乃とらり葉

片下歩あらんあま

かゆく かむす 作者はゆへ



